「日々の理科」（第 3597 号）　2024,-6,12

「石垣島離島紀行（19）」※２ページ

お茶の水女子大学サイエンス＆エデュケーション研究所

田中　千尋　Chihiro Tanaka

【３日目／５月２４日（つづき）】

（国土地理院地形図）

上の地図は、「日本最西端与那国島」の更に「最西端部」のものです。最西端の集落は「久部良（くぶら）」で、小中学校、港、郵便局などがあります。その更に西に「西崎（いりざき）」があり、そこに「日本国最西端之地」の石碑が建っています。しかし、よく地図を見ると、「西崎」よりもわずかに北西に「トゥイシ」なる「岩礁」が記載されています。

これがその「トゥイシ」です。実はこの岩礁、数年前の国土地理院の調査で、「大潮の満潮時でも海面上に姿を見せている」ということが判明し、2019 年から地形図にも記載されることになったものです。「大潮の満潮時でも海面上に姿を見せている」ということが「陸地」の定義なので、日本国最西端の陸地は「西崎」ではなく、厳密にはこの「トゥイシ」という岩礁ということになります。行ってその上に立ってみたかったのですが、断崖絶壁の下で、たとえ行きつけても帰れなくなりそうです。もしそこに「永住」することになったら、間違いなく新聞記事になってしまいます。泣く泣くあきらめました。

与那国島の西崎から台湾までは 110km ちょっとしかありません。船でも数時間で行ける距離です。一年間に数日、気象条件の良い日には、この西崎から台湾が見えるというので、眼を凝らして見ましたが、見えませんでした。ロート目薬を差してもう一度見ましたが、やはり見えません。天体観測用の結構高性能の双眼鏡も覗いてみましたが、どうしても見えません。写真にも写っていませんでした。要するに、台湾は見えませんでした。

こちらから台湾が見えるのなら、台湾から与那国島が見える可能性もあります。日本人のルーツ（先祖）の一部が、手作りの木製小舟で、台湾から与那国島に渡ってきたという説があります。それが本当なら、彼らは水平線の彼方に島影を見つけ、黒潮を横切ってこの地にたどり着いたのかも知れません。

西崎の展望台から台湾は見えませんでしたが、東側の久部良（くぶら）の集落はよく見えました。与那国島は島全体が与那国町という自治体ですが、大きな集落は、祖納（そない）、比川（ひがわ）、それにここ久部良の３つだけで、島民のほとんどはその３か所に家があります。石垣島からのフェリーが着岸できる大きな港は、ここ久部良港だけです。

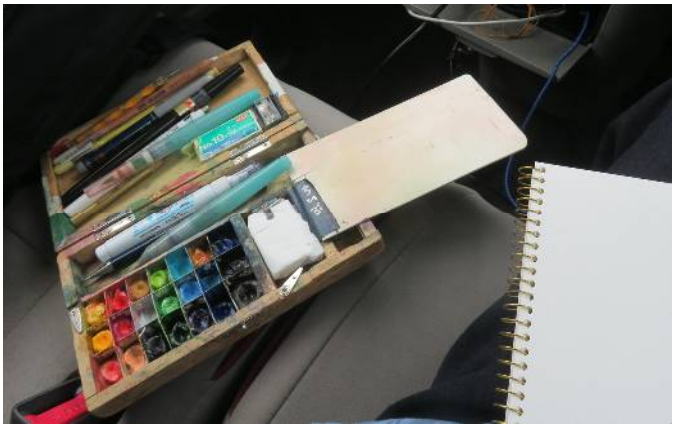
久部良よりも東側の「島の北側の海岸線」は絶壁が続いていました。私は与那国島を形成している「第三紀の堆積岩」を近くで見たいと思いました。

現地で岩石を入手する場合、かならず「露頭」から採取することが重要です。「露頭（ろとう）」というのは、地表や崖面に姿を現している岩石面のことです。そのへんに落ちている「転石」は、どこから運ばれてきたものかわかりません。工事に使われた砕石の場合もあるし、鳥が運んで来たものかも知れません。しかし露頭の岩石は、つながっている地層と同じものですから、価値が全くちがうわけです。

西崎灯台下露頭の岩石は、東京に持ち帰って研磨してみました。紙やすりで簡単に削れるほどやわらかい岩石で、粒状性と硬度から「泥岩」とわかりました。

側面に白いインクで「与那国西ザキ」と記入し、「日本国最西端之岩石」として、文鎮がわりに職場の机上に置くことにしました。

「日本国最西端観光」を無事に終えて、久部良港に戻ってきました。ここは「Dr.コト―診療所」の映画でも、最初のシーンのロケ地になった場所です。石垣島からの「フェリー与那国」が週に数便、乗客や生活物資を載せて発着しています。



この日はフェリーの入港予定はなく、港は閑散としていたので、私は安全な場所に車を停めて、岬の画を描くことにしました。写真は旅行に持ち歩いている画箱です。絵筆、絵具、ティッシュ、鉛筆その他の画材が全部入っていて、あとはスケッチブックだけあれば描けます。桐の箱も手作りです。しかし、筆の中に水がほとんどないことに気づきました！しまった！